

愛知県立大学付属図書館蔵

慶長書写『平家物語』翻刻 卷第十

近藤 政美

本稿は愛知県立大学付属図書館蔵の慶長書写『平家物語』（巻第十）の本文を翻刻したものである。

本書の整理番号は、貴913・4―45、一二巻中の一一巻（巻第三を欠く）、巻第四以降の末尾に「喜福内匠助、慶長拾年八月吉日」という識語がある。

凡例

- 一 原本を忠実に翻刻することを期した。
- 二 丁数は本文の始めを一とする。各丁の表裏の初めに丁数とオ（表）・ウ（裏）、各行の初めに行数を記す。
- 三 目次には、前項にしたがって、丁・表裏・行を補う。
- 四 句読点は記されていない。便宜上、添える。
- 五 朱で記された振り仮名・捨て仮名・濁点・校異の語句などは、

本文の右傍に記す。

六 見せ消ち・書き損じなどの文字は、右肩に*印を付す。

七 補われている文字は、補入すべき箇所を○印で示し、その右傍に記す。

八 漢字は、印刷の便宜上、現代通用の字体（常用漢字体）・J

IS漢字体などに改めたものもある。

例 寂 ↓ 最、 況 ↓ 況、 迹 ↓ 逃、

導 ↓ 碍、 乃 ↓ 給、 々 ↓ 候、

九 変体仮名・合字も現代通用の字体に改める。

例 𪛗（里） ↓ り、 𪛗（阿） ↓ あ、 々（多） ↓ た、

き（帝） ↓ て、 𪛗 ↓ コト、 𪛗 ↓ シテ、

一〇 誤字の訂正は、本行の文字の右傍、または振り仮名の次の括弧内に示した。

例 狼籍^(種)、風清^(世)、強^(カ)に、夜部^(シラヘヨヘ)、

『平家物語』諸本の略号

- 1 高 | 高野辰之氏旧蔵本(通称「高野本」)
- 2 竜 | 竜谷大学付属図書館蔵本
- 3 米 | 米沢市立図書館蔵本
- 4 内 | 内閣文庫蔵本
- 5 下 | 下村時房刊本(大東急記念文庫蔵)

△ 平家十卷之目録

- 一 首渡・・・・・・・・・・一才1
- 二 内裡女房・・・・・・・・六ウ6
- 三 八嶋院宣・・・・・・・・十四ウ1
- 四 請文・・・・・・・・十五才5
- 五 戒文・・・・・・・・十九ウ4
- 六 海道下・・・・・・・・二十四才7
- 七 千手前・・・・・・・・二十八才8
- 八 横笛・・・・・・・・三十五ウ7
- 九 高野卷・・・・・・・・四十ウ5
- 十 維盛出家・・・・・・・・四十三ウ6
- 十一 熊野参詣・・・・・・・・五十才2
- 十二 維盛入水・・・・・・・・五十三ウ2
- 十三 三日平氏・・・・・・・・五十八ウ5
- 十四 北方出家・・・・・・・・六十四ウ4
- 十五 藤戸・・・・・・・・六十六才6
- 十六 大嘗会沙汰・・・・・・・・七十三才2

オ1 △平家物語 巻第十

首渡 一

2 ○寿永三年二月七日、摂津国二谷にて被討平

3 氏の頸、十二日に都へ入。平家にむすほれたる人

4 くは、我方様にいかなる憂事をか聞んすらん、いか

5 なる憂目をかみむすらんと、歎あひ悲あはれけり。

6 中にも大覚寺に隠居給へる小松三位中将維

7 盛卿北方は、殊更おほつかふ思はれけるに、三位

○と

8 云公卿一人生捕にせられて、都へ上るなりと聞き給ひ

一ウ1 て、「此人はなれし物を」とて、引かつゐてそふし給

ふ。或

2 女房の参て申けるは、「三位の中将殿とはこれの御

3 事にては候はず。本三位中将殿の御ことなり」と

4 申ければ、「さては頸共の中に (米こそ) ぞあるらめ」とて、

いと心

5 安も思給はず。同十三日、大夫判官仲頼、六条河

6 原に出向て頸共請取。東洞院を北へ渡て、獄門

7 の木に可被懸由、範頼・義経奏聞す。法皇此事

8 如何、有すらんと思召わつらはせ給て、太政大臣・左

右

二オ1 の大臣・内大臣・堀河大納言忠親卿に被仰合。五人

2 の公卿被申けるは、「昔より卿相の位に至る人の

3 頸をわたさるゝ事、先例なし。中にも此輩は先

4 帝の御時より戚里臣として、久朝家につか

5 うまつる。範頼・義経か申状、あなかに御許容あ

6 るへからす」と被申ければ、渡さるましきに被定た

り

7 しを、範頼・義経重て奏聞しけるは、「保元の

8 昔を思へは、祖父為義か讎、平治の古を案す

二ウ1 れは、父義朝か敵也。今度平氏の頸渡されすらん

2 にをひては、自今以後何いさみあてか凶徒を退けん

3 や」と、兩人頻に訴申されければ、法皇力及はせ給

4 はて、終にわたされけり。みる人いく千万と云数をし

ら

5 す。帝闕に聯し袖し古は、をちおそるゝ輩多かり

6 き。巷に頭をわたさるゝ今は、又哀悲しますといふ

7 事なし。中にも大覚寺に隠居給へる小松三位中将

8 維盛卿の若君、六代御前につきたてまたりける

三オ1 斎藤五・斎藤六、余の無覚束に様をやつして

2 みければ、人々の御頸共は皆奉見知たれ共、三位中
3 将殿の御頸はみえ給はす。され共余の悲しさに、不
4 堪裏涙のみしけかりければ、よその人目もおそろ
し

5 くて、急大覚寺へそ参ける。北方、「さていかにや」
と問

6 給へは、「人々の御頸共は皆見しり奉たれ共、三位中
将殿

7 の御頸は見えさせ給候はす。御兄弟の御中には、備

8 中守殿の御頸計こそみえさせ給ひ候つれ。其外は

三ウ1 そんちやう其御頸、其御頸」と申ければ、北方、「何
も

2 人の上とも不覚」とて、引かつゐてそ伏給ふ。良あ

3 て、斎藤五涙を押して申けるは、「此一兩年は隠居

4 候て、人にも痛見しられ候はす。今暫もみ申ま

5 いらせたう存候つれ共、よに案内委う知たる者

6 の申つるは、『今度の合戦に小松殿の君達は播

7 磨と丹波のさかひて候なるみくさの山をかた

8 めさせ給候けるか、九郎義経に被破て、新三位

四オ1 中将殿・同少将殿・丹波侍従殿は播磨の高砂

2 より御舟にめして、讃岐八嶋へわたらせ給候ぬ。

3 何としてはなれさせ給て候けるやらん、備中守殿

4 計こそ今度一谷にて被討させ給て候へ。『扱三

5 位、中将殿の御事はいかに』と問候つれば、『それは軍

6 以前より大事の御いたはりとて、此たひはむかはせ

7 給候はすと申者にこそ逢て候つれ』と細々と

8 語申たりければ、北方、「それも我等か事を朝夕

四ウ1 心くるしう思給ふか、病となりたるにこそ。風の吹

2 日は今日もや舟に乗給らんと肝を消、軍といふ

3 時は只今もや被討給ひぬらんと心を尽す。ま

4 してさやうのいたはりなとをは、誰か心安うあつ

5 かひ奉るへき。あれを委うきかはや」と宣は、若君・

6 姫君など、「何の御いたはりとは問さりけるぞ」と

7 宣ひけるこそ哀なれ。三位中将もかよふ心なれば、

8 「矢にあたても死に、水におはれてもうせぬらん。い

五オ1 また在此世者とはよも思給はし。露の命の未

2 浮世になからへたるをしらせ奉らん」とて、使を一人

し

3 たてゝのほらせられけるか、三の文をそかくれける。

4 先北方への御文には、「都には敵みちくゝて、御身

5 一の置所^キたにあらしに、おさなき者共引具して、
6 いかになしうおほすらん。さらは是へむかへ奉て、
7 ひと所にていかにもならはやはと思へ共、我身こ
8 そあらめ、御為いたはしくて」など、細くと書て、奥
五ウ1 には一首の哥そありける。

2 いくともしらぬ逢瀬のもしほ草

3 かきをくあとを形見ともみよ

4 さておさなき人々の御許へは、「つれくをは

5 何として慰給らん。とくしてむかへとらんするそ」

6 と、こと葉もかはらす書て被^レ上。使都へ上、北方

7 に御文取出て奉る。是をあけて見給て、とかう

8 の事も宣はす、引かつゐてそ伏給ふ。かくて四

六オ1 五日も過しかは、使暇^ス申。北方泣く御返事書給ふ。

2 若君・姫君も面々に筆を染て、「さて父御前の御

3 返事をは何と申へきやらん」と問はれければ、北方、

「菟

4 も角もわ御前達か思はんする様を申へし」と

5 こそ宣ひけれ。「余に御恋しう思まいらせ候に、何

6 とて今までむかへさせ給はぬぞ。とくしてむかへとら

7 せ給へ」と、同じ言葉にそかゝれたる。使八嶋に帰参

8 て、三位、中将殿に御返事取出て奉る。先おさなき

六ウ1 人々の御返事を御らんしてそいと、無^ナ為方にはみえ

2 られける。「抑是より穢土^チをいとふにいさみなし。閻

浮

3 愛執の綱つよければ、浄土を願ふも懶。たゞ是より

4 山つたひに都へ上、恋しき者共をも今一度みもし

5 みえての後、自害をせんには不^レ如とそ、泣く語給ひ
ける。

6 大裡女房 二

7 ○同十四日、生捕本三位、中将重衡卿、大路を被^レ渡。

小

8 八葉、車の先後の簾を上、左右物みを開。土肥

七オ1 次郎実平、木蘭地直垂に小具足計して、随

2 兵三十騎相具して、車の前後を守護す。京中の

3 上下是をみて、「あな最惜、いくらもまします君達

4 の中に、此人一人かくなり給ふ事よ。入道殿にも二位

殿

5 にもおほえの御子にてましくしかは、一門の人々も

6 をもき事にして、院内へまいらせ給ふにも、老たるも

7 若も所おゝき、もてなし奉給しそかし。此人は奈良

8 を焼たる伽藍の罰なり」といひあへり。六条を東

七ウ1 へ河原まで被_レ渡_テ、却_{ヘツテ}故中御門の藤中納言

2 家成卿の八条堀河御堂にすゑ奉_{ッテ}、きひしう奉_ニ

3 守護。院の御所より御使に藏人左衛門權佐定

4 長、八条堀河へそ向ける。赤衣に帶_シ劔_ヲける。三位

5 中將は紺村滋直垂に、折烏帽子引立_ヲて御座_ス。

6 日來は何共思はれさりし定長を、今は冥途にて

7 罪人共か冥官にあへる心ちそせられける。「仰下

8 されけるは、『八嶋へ返_リ度は、一門の方へ云送_テ、三

種神

八オ1 器を都へ奉_レ返_シ入_ル。然は西国へ可_レ被_レ返_ルとの御氣色也。』

2 三位中將被_レ申けるは、「さしもの我朝の重宝三種神

3 器を、重衡一人にかへまいらせんとは、内府以下一門

者

4 共か一人も余_モ申候はし。若_シ女性て候へは、母儀_ニ品な

と

5 やさも申候はんすらん。さは候へ共、乍_レ居院宣を返

し

6 申せは、其恐も候。速_ニ申送_テこそ見候はめ」とそ被

7 申ける。院宣の御使平○左衛門重國、御坪召次

8 花方とぞ聞えし。二位殿へは御文細くと書_キてま

八ウ1 いらせらる。私の文はゆるされねは、御詞にて被_レ申

けり。

2 北方大納言佐殿へも御詞にて事つて給ふ。「旅の

3 空にても、人は我に慰_メ、我は人に慰_メし物を、引わか

4 れ奉_テ後、いかに悲しう覺すらん。『契は不朽物』と

申せ

5 は、後世には必生れ逢奉_ルへし。一蓮にと祈給_ヘ」と

6 泣く事付給ければ、重國もよに哀に覺えて、押_ハ

7 涙て罷立_ッ。爰に三位中將の侍に木工右馬允

8 知時と云者あり。其夜土肥次郎実平に逢_テ

九オ1 云けるは、「是は先年中將殿に被_レ召使_ニまいらせ候

2 し某と申者にて候。西国へ御下の時も御供可_レ仕

3 候しか共、八条女院に兼參の者て候間、京都に罷

4 留候き。弓矢をとる家に候はねは、軍合戦の御供

5 を仕事も候はす、たゞ朝夕抵候せし計て候。今日

6 大路にてみまいらせ候へは、余にいとおしう思まいら

せ

7 候。何かくるしう候へき、御宥れを蒙_{ッテ}今一度御そ

8 は近參_{ッテ}、はかなき昔語をも申て、慰まいらせはや

九ウ 1 と存候。猶無覚束思召され候は、腰の刀を召

2 をかれ、曲て御ゆるさを蒙らんと云ければ、土肥次

3 郎、情ある者にて、「誠に御一身の御事は何かく

4 るしう候へき。乍去も」とて、腰刀を乞取てそ入

5 てける。右馬允不斜に悦、急参て御有様を見

6 奉るに、誠に思入給へると覺しくて、御姿もいたく

7 しほれかへておはしける御有様をみ奉に、知時涙

8 も更に難押。中將も夢に夢みる心ちして、菟

十オ 1 角の事も宣はす。其後昔今の物語共し給て、

2 「さても汝して物云し人は、未内裏にとや聞。」「さこ

3 そ承候へ。」「西国へ下時、云置ことのなかりしは、世

この

4 契は皆偽に成にけりと思らんこそはつかしけれ。

5 文をやらはやと思は。尋て行てんや」と宣へは、知時

6 「安程の御事候」と申。中將不斜に悦、頓書てそ

7 たうたりける。守護武士共、「いかなる御文にてか候

8 らん。見まいらせん」と申ければ、中將、「みせよ」

と宣へは、

十ウ 1 みせてげり。「くるしう候まし」とて、とらせけり。

知時こ

2 れを取て内裏へ参たりければ、ひるは人目のしけ

3 ければ、其辺近き小屋に立より日を待暮し、た

4 そかれ時にまきれ入、件の女房の局の下口辺

5 にたゝすみて聞ければ、此女房の声と覺しく

6 て、「人は皆ならを焼たる伽藍の罰なりといひ

7 あへり。中將もさそいひし。『心に起ては焼かね共、

8 悪党多かりしかは、手く火を放て、多の堂塔

十一オ 1 を焼亡す。末の露下のしつくのためしあれば、

2 重衡一人か罪業にこそならんすらめ」と云しか、現

3 にさと覺ゆるそや」とてなかれければ、「是にも未忘

4 給はさりけり」と難有思て、「物申さうといへは、

「何、

5 より」とこたふ。本三位中將殿より御文の候」と申た

り

6 ければ、日比はちてみえ給はぬ女房の、「いつらや

7 いつら」とて、走出、手つから取てみ給ふに、西国に

て

8 生捕にせられて、今日明日とも不し知身の行末

十一ウ 1 を細く書て、奥には一首の哥そありける。

2 涙川うき名をなかつ身なりとも

3 いま一たひのあふせともかな

4 女房此文を懐に引入、菟角の事も宣はす、

5 引かつゐてそ臥給ふ。かくて時剋遥にをし

6 うつりければ、時の程もおほつかなく思まいらせ候

7 に、はやく御返事給て帰参候はん」と申ければ、女

房

8 泣く御返事書給ふ。心くるしういふせて、二

十二才1 年を送たる心の中を細くと書て

2 君ゆへにわれもうき名をなかつとも

3 そのみくつとともにになりなむ

4 知時是を取て帰参たりければ、守護武士共、又、

5 「いかなる御文にてか候らん。みまいらせん」と申ければ、

6 みせてけり。「苦候まし」とて、三位中将に奉る。中

7 将是を見給て、いと、思やまさられたりけん、

8 土肥次郎実平を召て宣けるは、「さても此程各の

十二才1 情ふかふ芳志をはしつるこそ有かたふうれし

2 けれ。さては最後に今一度芳恩蒙りたき事

3 あり。我は一人の子なれば、浮世に思置事なし。

4 年来契りたる女房の、未内裏にと聞。今一

5 度対面して、後生の事をも申をかはやと思は叶

6 はしや」と宣は、土肥次郎情ある者にて、「女房なと

7 の御事は何かくるしう候へき。とうく」とて、ゆる

し

8 奉る。中将不斜悦、人に車借てつかはす。女房とる

十三才1 物も取あへず、急乗てそおはしける。縁に車を

2 遣寄、此由かくと申たりければ、中将、守護武士

3 共の見まいらせ候に、おりさせ給へからす」とて、車

の

4 簾を打かつき、手に手を取組、顔に顔を押当、し

5 はしは物も宣はす、只泣より外の事そなき。良あて、

6 中将涙をおさへて宣けるは、「西国へ罷下候し時も、

7 申置事候はす。其後又いかなるたよりも、御文をも

ま

8 いらせて、御音信をも承はらまはしう候しか共、朝夕

十三才1 の軍に隙なくて、罷過候にき。今又か様に人しれぬ

2 うき目を見候も、二度相み奉るへきにて候けり」と

3 て泣給ふ。互の心の中、被推量て哀也。かくて小夜

4 もやうく深行は、「此程は大路の狼藉に候。とうく」

5 とて、返被奉。中将別の袖をひかえて、

6 あふ事も露の命ももろともに

7 こよひはかりやかきりなるらん

8 女房涙をおさへて、

十四才 1 かきりとて立わかるれは露の身の

2 君よりさきにきえぬへきかは

3 さて女房は内裏へまいり給ぬ。其後は守護武士共

4 ゆるさねは、力及はす、時々只御文計そかよひける。

5 此女房と申は、民部卿入道親範の女也。みめ容うつ

6 くしく、心様優におはしけり。されは中将南都へ被

7 渡きられ給ぬと聞えしかは、頓様をかへ、濃墨染に

8 やつればて、かの後世菩提を吊給ふそ哀なる。

十四ウ 1 八嶋院宣 三

2 ○去程に、院宣御使、平三左衛門重国・御坪召次

3 花方、八嶋へ参、院宣を奉る。大臣殿以下一門の卿

4 相雲客よりあひ給て、此院宣をそ被披ける。

5 一人聖跡、出北闕九禁、幸諸州、三種神器、埋

南海・

6 四国、経数年、尤朝家之歎、亡国之基也。抑此重

7 衡卿、東大寺焼失之逆臣也。須任頼朝朝臣申請旨、

8 雖死罪可被行、独別親族、已成生捕。籠鳥恋

十五才 1 雲思、遙浮千里南海。飯雁失友心、定通九重中

2 途乎。然則三種神器於都奉返入、彼卿可被寛

3 宥也。者院宣如此。仍執達如件。寿永三年二月十

四日、

4 大膳大夫成忠か承、進上平大納言殿へ、とそ被書た
る。

5 請文 四

6 ○大臣殿より平大納言の許へは、院宣の趣を被し申

7 けり。二位殿は中将の文をあけてみ給に、「今一度重

8 衡を御らんせんと思召され候は、内侍所の御事を能く

十五ウ 1 申させ給て、都へ返し入まいらせ給へ。さ候はては、

此世

2 にて御見参に罷入へしとも存候はす」とそ被書

3 たる。二位殿中将の文を顔に押当て、人々のおはしけ

る

4 後の障子を引開、大臣殿の御前に倒臥、しは

5 しは物も不宣。良あておきあかり、涙をおさへて宣

6 ひけるは、「京よりあの中将か云おこしたる事の無慚

さ

7 よ。現にも心中に如何計の事をか思ひたるらん。内

8 侍所の御事をは、我に思有して都へ返し入まい

十六オ1 「らせよ」と宣は、大臣殿被_レ申けるは、「宗盛もさこそ
存

2 候へ共、兵衛佐頼朝か返聞かんする所も返_く無_二云甲

3 斐候へし。其上、帝王の有_{タモクセ}御世_{シツ}給ふ御事は、偏
に

4 此内侍所の渡らせ給ふ御故也。且は世の聞も不可_レ然

5 且は余の子共、親人_{シラン}を_レは、中将一人に思召かへさ
せ

6 可_レ給か。子の悲しひも事にこそ依_リ候へ。努_く叶候

7 まし」とそ申されける。二位との重て宣けるは、「我_レ
故

8 入道にをくれてのち、一日片時も命いきてなか

十六ウ1 らふへし共覚えね共、主上の無_ク何旅_{イト}た_くせ給御事

2 の御心くるしさ、又君をも今一度代にあらせ奉らん

3 と思ふ故にこそ、うきながら今日までもなからへたれ。

4 あの中将一谷にて生捕にせられぬと聞し後は、

5 いと_く胸せきて、湯水も咽へ不_レ被_レ入。中将此世に

6 なきものときかは、我も同じ道へ趣_{ソモムカ}んと思ふ也。二一
度

7 物を不_レ思_セ先に、只われをうしなへ」とて、おめき叫給

8 けり。誠にさこそは思ひ給らめといたはしく覚え

十七オ1 て、人_く皆ふし目にそなられける。新中納言知

2 盛卿の意見に被_レ申けるは、「内侍所を都へ奉_ッ返_レ

3 入_レたり共、重衡を返_シ給らんこと有かたし。只無_{ナク}憚_{ハナ}其

4 様を申させ給ふへうや候らん」と被_レ申ければ、大臣

殿、「此

5 義尤可_レ然」とて、御請文の様を被_レ申けり。二位殿は

6 涙にくれて筆の立度も覚え給はね共、泣_く御

7 返事書給ふ。北方大納言佐殿も涙にむせひうつ

8 むして、菟角の事も不宣、引かつゐてそ伏給ふ。

十七ウ1 誠にさこそは思ひ給ふらんといたはしくて、重国涙

2 を押て立にけり。平大納言時忠卿は、御坪召次

3 花方を召て、「いかに汝は花方か」「さん候」「法皇

御使に

4 多の浪路を凌_シてはる_くとは是_{マデ}訖_リ下たるし

5 るしに、汝一期か間の思出ひとつ有へし」とて、花方

か頬

6 に浪方といふ烙_{ヤキンルシ}をそせられける。其後都へ上たり

7 ければ、法皇叡覽あて、「汝は花方か」「さん候」。

「能く不

8 及力。浪方とも召かし」とて、咲はせ御座。其後、

請文

十八オ1 をそひらかれける。今月十四日院宣、同廿八日、讃岐

2 国八嶋磯到来。謹以承処如件。但就此案、彼、通盛

3 卿以下、当家族輩摂州一谷、既被誅了。何可悦

重

4 衡一人寛宥哉。夫我君受、故高倉院御讓、御

5 在位既四ケ年、政訪、堯舜古風、処、東夷北狄結

6 党、成、群入洛間、且幼帝母后御歎尤深、且依外

7 戚近臣憤、不、浅、暫幸九国。於無還幸三種神器

8 争可奉離玉牀哉。其臣以君為心、君以臣為牀。

君

十八ウ1 安、則臣安、臣安則国安。君上憂、臣下不

2 有愁、牀外無悦。曩祖平將軍貞盛、自追討

相

3 馬小次郎將門、請東八ケ国、伝子孫、誅罰

朝敵

4 謀臣、至代々世々、奉守朝家聖運。然則故亡父

大

5 政大臣保元平治兩度逆乱時、重勅命、輕私命。是

6 偏為君、全不為身。就中彼頼朝、去平治元年十

7 二月、依父左馬頭義朝謀反、頻可誅罰由、雖仰

下、

8 故入道大相国、慈悲余所被申有也。然忘昔洪

十九オ1 恩、不存芳意、忽以浪羸身、猥成蜂起乱。至

2 愚甚、申有余。早招神幣、天罰、密都敗績

3 損滅者乎。夫日月為一物、不暗其明、明王

為一

4 人不枉其法、以一惡不捨其善、以小瑕莫

覆其

5 功、且当家族代奉公、且亡父数度忠節、不思食忘、

6 君辱可有四国御幸乎。時臣等承院宣、一一還

7 旧都、雪会稽恥。若不致鬼界・高麗・天

8 竺・震旦。悲哉、当人王八十一代御宇、我朝神代

十九ウ1 宝、遂空作異国宝乎。宜以是等趣、可然様令

洩

2 奏聞。宗盛頓首謹言。寿永三年二月廿八日、從一

3 位前、内大臣平朝臣宗盛請文、とこそ被書たれ。

4 戒文 五

5 ○未左右不被_レ申ける程は、人々内々いふせう被_レ思
つ

6 るに、請文既到来してければ、「されはこそ、我朝

7 の重宝、三種神器を、重衡一人にかへまいらせん

8 とは、よも被_レ申しと思ひたれは」とそ、人々申合け
る。

二十 オ1 三位中将も、「内府以下一門者共いかにかに悪思ふらん」

2 と、後悔せられけれども無_レ申斐。請文既到来して、

3 本三位中将重衡、卿関東へ可_レ被_レ下聞えしかは、

4 都の名残も今更惜_レそ被_レ思ける。土肥次郎実平

5 を召て、「出家のしたきをはいかせんする」と宣は、

此由

6 を九郎御曹司へ申。院御所へ被_レ奏聞たりければ、法

7 皇、「頼朝にみせて後こそ、ともかうもはからはめ。

争

8 か只今は可_レ宥」と仰ければ、三位中将に此由を申。

二十 ウ1 「さらは年来契たりし聖に、今一度対面して、後

2 生事をも申談せはやと思はいかに」と宣は、土肥次郎

3 「聖を是谁とか申候そ。」「黒谷の法然房と申人也」。

4 「さてはくるしう候まし。とうく」とて、奉_レ宥。
三位

5 中将不_レ斜に悦、奉_レ請_レ聖て被_レ申けるは、「さても今

6 度重衡か乍_レ生被_レ捕て候けるは、二度上人の御見

7 参に可_レ罷入て候けり。重衡か後生いか、仕候へき。

8 身の身にて候し程は、出仕にまきれ、政務に

二十一 オ1 羈_{ホタサレ}、驕慢_{ケウマン}の心のみ深て、不_レ顧_レ当来昇沈_ヲ。況運_ヤ

2 尽世_チ乱_レて都を出し後は、あそこに 闕_{（闕）タケカイ} 此に争_{アラソイ}、人

を

3 亡し身を助からんと思惡心のみ庶_{（庶）ツ}て、善心は且て

4 不_レ発。就_ニ中南部炎上_ニの事、云_{（云）}王命_ト、云_{（云）}武命_ト、

5 事_{ツカヘ}君随_ニ世法難_{ニハク}遁_レして、罷向_{（向）リツ}て候し程に不慮

6 に伽藍の滅亡に及_ヒ候し事、不_レ及_レ力次第也。時の

7 大將軍にて候し間、責_{（責）セイイナシ}一人に帰_キすとかや申候な

8 れは、重衡一人か罪業にこそなり候ぬらめと覚

二十一 ウ1 候。且は彼此恥_{（恥）サラン}を曝_{（曝）サラン}候も、併_{（併）ヒト}其報_{（報）ムコイ}とのみこそ思

2 しられて候へ。今は剃_{（剃）チ}頭_{（頭）ツ}、持_{（持）タモナ}戒_{（戒）ツ}なとして、仏道修行

し

3 たふ候へ共、かゝる身に罷成_{（成）ツ}て候へは、心に心をも任

候はす。

4 今日明日とも不知身の行ゑに罷成て候に、いか

5 なる行を修して、一業可扶とも覚候ぬ事こそ

6 口惜候へ。倩く一生の他行を思ふに、罪業は須弥よりも高、

7 善根は微塵はかりも無蓄。かくて空う命終候

8 なは、火穴湯の苦敢疑なし。願は、上人起慈悲、垂憐、

二十二オ！懸悪人の可助方法候は、しめし給へ。其時上人、咽涙

2 俯臥て、とかうの事も不宣。良あて、上人押涙て宣

3 けるは、「誠に受難人身を受なから、空う三途に帰ま

4 しまさん事、悲ても猶有余。然に今厭穢土、願淨

5 土に、捨悪心、発善心、ましまさん事、三世諸仏も定

6 て、随喜し給ふへし。就其、出離の道区也といへ共、

7 末法濁乱機には、以称名為勝。志を分九品て、

行

8 を縮六字て、いかなる愚癡闇鈍の者も、となふるに

二十二ウ！便あり。罪深ければとて、卑下し給ふへからず。十悪

2 五逆廻心すれば、遂往生。功德少ければとて、

不絶望。

3 致一念十念之心、来迎す。『専称名号至西方』と尺

4 して、専名号を称すれば、至西方。『念く称名懺悔』

5 と宣て、念くに弥陀を唱れば、懺悔する也と教たり。

6 『利剑即是弥陀号』をたのめは、魔縁不近。『二

声

7 称念罪皆除』と念すれば、罪皆のそけりとみえたり。

8 浄土宗の至極各存略、大略是を肝心とす。但往

二十三オ！生の得否は信心の有無によるへし。只此教を深信

2 して、行住座臥時処諸縁をきはす、三業四威

3 儀にをひて、心念口称を不忘給は、畢命を期と

4 して、此苦域界を出て、彼不退土に往生し給はん

5 何の疑か有哉』と教化し給へは、三位中将不斜悦、

「此

6 次に持戒はやと存候は、出家不仕しては叶候まし

7 や」と被申ければ、不出家人も、持戒事、常の習

なり」

8 とて、額に当剃刀、剃まねをして、被授十戒、

三位

二十三ウ 1 中将流「随喜涙」、是を受持給ふ。上人もよろつ物あ

2 はれに覺て、かきくらす心ちして、泣く戒をそ説ける。

3 御布施と覺敷て、年来おはして被遊ける侍

4 の許に被預置たりける御硯を、知時して召

5 寄奉^{セリ}上人、泣く被申けるは、「是をは相構て人

6 にたひ候はて、常に御目のかゝらん所に被置候て、

7 某か物そかしと御覽せられん毎^{コト}度^{タビ}には、御念

8 仏候へし。又、御暇^{ヒマ}には経をも一卷御廻向候は、可

二十四オ 1 然候へし」など、被申ければ、上人是を取て入懷、

2 とかうの事も不宣、墨染袖を顔に押当て、泣

3 く帰給けり。件の硯は、親父入道相国の砂

4 金多^タ宋朝御門へまいらせ給ひたりしかは、

5 返報と覺しくて、日本和田平大相国の許へ

6 とて、被送たりけるとかや。名をは松陰とそ申ける。

海道下 六

8 ○去程に、此重衡卿をは鎌倉前兵衛佐頼朝

二十四ウ 1 頻被^レ申ければ、「さらは可^レ被^レ下」とて、土肥次郎実

2 平か手より、九郎御曹子の宿所へ渡し奉る。

3 同三月十日、梶原平三景時に被^レ具て、鎌倉へ

4 こそ被下けれ。西国より被^レ生捕て、都へ上るたにも

5 口惜に、いつしか又関東へ被趣けん心中、被^レ推量

6 て哀也。四宮川原に成ぬれば、爰は昔、延喜第

7 四王子蟬丸の関の嵐に心を澄し、琵琶引

8 給ひしに、博雅三位と云し人、風の吹日もふかぬ

二十五オ 1 日も、雨のふる夜もふらぬ夜も、三年か間運^ヒ歩、

2 立聞て伝^ヘ彼三曲けん、薬屋の床の古も被^レ想

3 像て哀也。相坂山打越て、瀬田唐橋駒もと、

4 ろと踏ならし、雲雀あかれる野路の里、志かの

5 浦浪春かけて、霞にくもる鏡山、此良の高根

6 を北にして、伊吹の嵩も近付ぬ。心を留とし

7 なけれ共、荒て中くやさしきは、不破関屋の

8 板ひさし、いかに鳴海の塩干潟、涙に袖はしほ

二十五ウ 1 れつ、彼在原のなにかしの、唐衣きつなれにし

2 と詠^シ劍、三河国八橋にも成ぬれば、蛛手に物を

3 と哀也。浜名橋を渡給へは、松の梢に風牙て、入

4 江にさはく浪の音、さらても旅は物うきに、心を尽

5 夕ま暮、池田宿にもつき給ひぬ。彼宿の長者ゆ

6 やか娘、侍従か許に其夜は被宿けり。侍従、三位

7 中将をみ奉て、「日来は伝にたに思ひよらさりし

8 人の、今日はかゝる所へ入せ給ふふしきさよ」とて、

一首の

二十六オ 1 哥をたてまつる。

2 旅の空はにふの小屋のいふせさに

3 ふるさといかに恋しかるらん

4 三位中將の返事に、

5 ふる里も恋しくもなしたひの空

6 みやこもつゐのすみかならねは

7 中將、「やさしうもつかまたるものかな。此哥の主は

8 たれと云やらん」とはれければ、景時畏て申け

二十六ウ 1 るは、「君はいまたしろしめされ候はすや。あれこそ

八嶋

2 の大臣殿の未当国の守にて御渡候し時、めされ

3 まいらせて御最愛候しか、老母を是に留置、暇

4 を申せ共不給ければ、比は弥生のはしめなりけるに、

5 いかにせむみやこの春もおしけれと

6 なれし吾妻の花やちるらん

7 と仕、暇を給て下て候し海道一の名人にて

8 候へ」とそ申ける。都を出て、日数ふれば、弥生も

二十七オ 1 過半、春も既に 欲暮。遠山花は残の雪かと

2 みえて、浦うら嶋々かすみ渡り、こしかた行末の

3 思つゝけ給ふにも、「是はされはいかなる宿業の

4 うたてさそ」と宣て、只不盡物は涙也。御子の一

5 人もおはせぬ事を、母の二位殿も歎、北方大納言

6 佐殿も無本意事にして、諸の神仏に祈被

7 申けれ共、無其驗。「かしこうそなかりける。子た

にも

8 あらましかは、いかに心くるしからん」と宣けるこそ

せめて

二十七ウ 1 の事なれ。さよの中山にかゝり給ふにも、又可越

2 共覚えねは、いと哀のかすそひて、袂そぬれま

3 さる。宇津山辺の蔦の道、心細も打越て、手越を過

4 て行は、北に遠かて、雪白山あり。問は甲斐のしら

5 根といふ。其時三位中將、落涙をさへて、

6 おしからぬ命なれともけふまでそ

7 つれなきかひのしらねをもみつ

8 清見関打越て、富士のすそ野に成ぬれば、北

二十八オ 1 には青山峨々として、松吹風素々たり。南に

2 は蒼海漫々として、岸打浪も茫々たり。「恋

3 せはやせぬへし、恋せずも有けり」と、明神の歌

4 始給けん足柄山をも打越て、こゆるきの杜、鞠

5 子河、小磯大磯の浦く、やつまと、とかみか原、御
6 輿崎をも打過て、いそかぬ旅とは思へ共、日数漸く
7 かさなれば、鎌倉へこそ入給へ。

8 千寿 七

二十八ウ1 兵衛、佐急対面して、「抑奉^ル休^ミ、二君御憤^ヲ、
雪^{キヨス}二父^ニ」

2 恥^シ思立上は、亡^{ホロホサン}平家事案の内に候へ共、まさし
う

3 か様に可^シ入^ニ見参^ニとは不^レ存候き。此定ては、八嶋

4 大臣殿の見参にも罷入ぬと存候。抑南都を亡さ

5 せ給ける御事は、故太政入道殿の仰にて候けるか、

6 又時にとての御計か。以外の罪業にこそ候らめ」と

7 被^レ申ければ、三位中将宣ひけるは、「先南都炎

8 上事、非^ス故入道成敗、非^ス重衡発起^{ニモ}。為^ニ靖^ニ衆

二十九オ1 徒悪行^ヲ罷向て候し程に、不慮に及^ヒ伽藍滅亡^ニ」

2 候し事、不^レ及^ル力次第也。昔は源平左右に争^フ

3 て、朝家の御かためと有しか共、近比は源氏の

4 運傾^{カタムイ}たりし事をは、皆人存知の事也。事新

5 う始て申へきにあらす。当家は保元・平治^{ヨリ}以来、

6 平^ケ度^ノ朝敵^ヲ、勸賞余^リ身^ニ、帝祖太政大臣に

7 至、一族の昇進六十余人、廿余年の以来、榮^イ榮^ヘ
8 無^シ申計^リ。され共運尽ぬれば、重衡とらはれて

二十九ウ1 是^{マデ}訖下候ぬ。就^キ其候ては、帝王の御敵^{シカタキ}討^ツたる

2 者は、七代まで朝恩不^レ失^セと申事は、極^ツたる僻事^カ

3 にて候けり。其故は、故入道は君の御為に既

4 命を失はんとする事度^ニに及^フ。され共その身

5 一代の幸にて、子息か様に可^シ罷成^ニやは。況運^ヤ尽

6 世乱て都を出し後は、暴^シ骸山野^ニ、可^シ流^ス名^ヲ

7 西海浪^ニとこそ存せしか、生なから因^{トラハレ}て是まで下^ル

8 へしとは、かけても思はさりき。た^ニ先世の宿業

三十オ1 こそ口惜^ウ候へ。但^シ、『殷湯は夏台に被囚^ニ、文王は羑里

2 に被^レ囚^ニ』と云文あり。上古猶如此。況^ヤ於^ニ末代^ヲをや。

弓矢

3 をとる習、敵の手にかゝて命を失はん事、全恥に

4 て恥ならず。只芳恩には早^{トウ}く可^シ被^レ刎首^ニ』とて、其後

5 は物も不^レ宣。梶原是を承^ツて、「あはれ大將軍や」とて、

6 流^ス涙^ヲ。侍共も皆袖をそぬらしける。兵衛、佐も、「平

7 家を別して私の敵と思ひ奉る事は、努^ツ候はす。只

8 帝王の仰こそ重^{ツモウ}候へ」とそ被^レ申ける。此人は亡^シ南

都^ヲ

三十 ウ1 たる伽藍の敵なれば、大衆定て申旨もやあらんす

2 らん」とて、伊豆国住人狩野介宗茂に被預。其躰、

3 冥途にて娑婆世界の罪人を七日くゝに十王

4 の手へ被渡らんも、かくやと覺て哀也。狩野介有レ情

5 者にて、痛緊も不奉レ当。やうくゝにいたはり、湯と

6 のしつらひなとして、御湯ひかせ奉る。道すからの汗

7 いふせかりければ、身を清めて失はんするにこそと待

8 給ふ処に、さはなくして、年の齡廿計なる女房の、

三十一オ1 色白清氣にて、髪のかゝり優に誠に美。か、目結の

2 帷に染付の湯巻して、湯殿の戸押開て参たり。

3 良あて、十四五計の女童の、髪は相長なるか、こむら

4 この帷にはんさう鹽に櫛入て参たり。此女房かい

5 しやくにて、良久あひ、髪洗なとして、あかり給ぬ。

6 さて、彼女房暇申て既出んとしけるか、「男なとは

7 こと(*)なふもそ思食。女は中くくるしからしとて、

8 鎌倉殿よりまいらせられてさふらふ。『それ何事にて○』

三十一ウ1 おほしめさん御事をは、承て申せ』とこそ、兵衛佐殿は

2 仰侍つれ」と申ければ、三位中将、「今は是程の身に

3 成て、何事をか思ふへき。思事としては、出家そしたき」

4 とぞ宣ける。帰参て、此由を申す。兵衛佐、「不寄

思。

5 私ワタシの敵ならはこそ。朝敵として奉預たる人なれば、

6 不寄思」とぞ宣ける。其後、三位中将、守護武士

7 共に宣けるは、「さても只今の女房は優なりつるもの

8 かな。名をはたれと云やらん」と被問ければ、「あれ

は手越

三十二オ1 の長者か女メスて候を、みめかたち、心様優にわりな

2 きもので候とて、此二三年鎌倉殿に被召使マま

3 いらせ候。名をは千手前と申候」とぞ申ける。其夕、

4 雨すこしふて万物さひしき折節、件女房琵琶

5 琶・琴持て参たり。狩野介、家子郎等十余人

6 引具して、御前近そ候ける。狩野介奉進酒。千

7 手前取酌。三位中将少承て、最無興氣にて

8 おはしけるを、狩野介申けるは、「且聞召されて候

三十二ウ1 候らん。宗茂はもと伊豆国の者にて候間、鎌倉

2 ては旅て候へ共、心の及はん程は可奉公仕候。『懈

怠に

3 て頼朝恨な」とこそ仰候しか。それ何事にても

4 酒進参マイラセさせ給へ」と云ければ、千手前閣サンライチ酌、

「羅綺

5 為^ル重衣^ニ、妬^ム無^キ情^ヲ於^ニ機婦^ニ」と云朗詠を二両反し

6 たりければ、三位中將宣けるは、「此朗詠せん人をは、北野天神一日に三度翔^ツて守らんと誓はせ給也。

8 され共、重衝は今生てははや被^レ捨奉^タたれば、助音し
三十三才1 ても何かはせん。罪障可^キ輕^キ事^ニならば、可^シ隨^フ」とそ

宣

2 ける。千手前頓、「雖^モ十惡^ト猶^モ引^キ撰^ス」といふ朗詠を

3 して、「極楽ねかはん人は皆、弥陀の名号を唱ふへし」

4 と云今様を四五返うたひ澄^スしたりければ、三位中將其

5 時被^レ傾^キ盃^ヲ。千手前給て、狩野介にさす。宗茂か

6 飲^ム時に琴をそ引すましたる。三位中將宣けるは、

7 「普通には此^カ樂^ヲをは五常^ノ樂^トといへ共、為^ニ重衝^カは

8 後生^ノ樂^ヲとこそ勸^ムすへけれ。頓^ニ往生^ノ急^ヲをひかん」

三十三才1 と戲^レて、把^{トリ}琵琶^ヲ、点手^ヲをねちて、皇聲^ノの急

2 をそ被^レ引ける。夜も漸^ク深^ク、万心^ノの澄^ムのまゝに、「あな

3 不^レ思^フや、東^ノにもかゝる優^ニなる人の有けるよ。何事に

4 ても今^ノ一声^ヲ」と宣へは、千手前重て、「二樹の陰に

5 宿^リ逢^フ、同^シ流^ヲを結^スふも、皆是^ニ先世^ノの契^ヲ」と云白

6 拍子を誠に面白^クかすへたりければ、三位中將も、「燈

7 闇^ニ數^ス行^ノ虞^ノ氏^ノ涙^ヲ」と云朗詠をそせられける。

8 縦^ハは此朗詠の心は、昔^シ唐^ノに漢^ノ高祖^トと楚^ノ項羽^ト

三十四才1 と争^ヒ位^ヲ合戰^スする事七十二度、毎^ニ戰^ニ項羽^ヲ勝^チぬ。

2 され共終には項羽戰^マ負^ケて亡^ハける時、雖^モと云馬の

3 一日^ニに千里を飛^ビに乗^リて、虞氏と云后^トと共に

4 逃^ニ去^リとしけるに、馬いかゝ思けん、足を調^トて不^レ動。

5 項羽流^レ涙^ヲ、「我^カ威勢^ハ既^レ廢^レたり。敵^ノの襲^ハは事

6 の數^ハならず、此后に別事を(「敵のかなしさよ」とて)終夜嘆^キ悲^ミ給^ヘけ

り。燈^ト

7 闇成しかは、心細^ッて虞氏流^ス涙^ヲ。深^ク行^キまゝに軍

8 兵四面に時をつくる。此心を橘相公の詩につくれ

三十四才1 るを、三位中將今思出^ラれたりけるにや、いとやさし

2 うそ聞えし。去程に夜も明ければ、武士共暇申

3 て罷出。千手前も歸にけり。其朝、兵衛佐殿

4 は持仏堂に法花經讀^クておはしける処に、千手前

5 参たり。佐殿打^ヒ咲^キ給^ヘて、「さても千手に中人をは

6 面白^クもしたる物を」と宣へは、齋院次官親義御

7 前に物書^キて候けるか、「何事にて候やらん」と申。「平

8 家の人々は甲冑弓箭の外は無^シ他事^ト」とこそ

三十五才1 日比は思^ハるたれば、此三位中將の琵琶の撥音、

2 朗詠の様、終夜立聞たるに、優にやさしき人にて
3 おはしけり」。親義申けるは、「たれも夜部承度候
し

4 か共、折節あひいたはる事有て、承はらず候。此後
5 は常に立聞候へし。平家は代々の哥人・才人達に
6 て候也。先年あの人共を喩花候しは、此三位中
7 将をは喩牡丹花て候しそかし」とそ申ける。三位
8 中将の琵琶の撥音、朗詠の口占、兵衛佐殿後

三十五ウ 1 まても難有事にそ宣ける。千手前は中くに
2 物思ひの種とや成にけん。されは中将南都へ被
3 渡て、被伐給ぬと聞えしかは、頓替様、濃墨染
4 にやつれはて、信濃国善光寺に行澄してゐ
5 たりけるか、彼後世菩提を吊、我身も頓遂往
6 生之素懐けるとそ聞えし。

7 横笛 八

8 ○去程に小松三位中将維盛卿は、身からは八嶋
三十六オ 1 に在なから、心は都へ被通けり。故郷に留置給ひし
2 おさなき人々の面影のみ身にひしと立添て、無忘
3 間ければ、「有に無申斐我身哉」とて、寿永三年
4 三月十五日の暁、忍ひつゝ八嶋の館をはまきれ

5 出て、与三兵衛重景、石童丸と云童、舟に心得
6 たれはとて武里と云舎人、是等三人をめし具し
7 て、阿波国結城浦より乗小舟、鳴戸の奥を
8 漕過て、紀伊路へ趣給けり。和哥・吹上・衣通姫
三十六ウ 1 の神とあらはれ給へる玉津嶋の明神、日前・国
2 懸御前過て、紀伊湊にこそ付給へ。「是より

3 山つたひに都へ上て、恋しき者共を今一度みも
4 しみえはやとは思へ共、本三位中将被生捕て、大
5 路を被渡、京・鎌倉、恥をさらすたにも口惜に、
6 此身さへ被囚て、父のかはねに血をあやさん事も心
7 うし」とて、千度心は進共、心に心をからかひて、高
8 野御山に参給ふ。高野に年比知給へる聖あ

三十七オ 1 り。三条・斎藤左衛門大夫茂頼か子に、斎藤滝
2 口時頼と語し物也。元は小松殿の侍也。十三の年
3 本所へ参たりしかは、建礼門院の雑仕横笛と
4 云女あり。滝口是を最愛す。父此由を伝聞て、
5 「世にあらんものゝ婿子にもなして、出仕などを心
6 安うせさせんとすれば、よしなき物を思ひ初て」
7 と、強に諫ければ、滝口申けるは、「西王母と聞し
8 人、昔は有て今はなし。東方朔といし者も、名

三十七ウ 1 をのみ聞て目にはみず。老少不定の世中は、

2 たゞ石火の光に不異。縦人雖長命、七十・

3 八十をは過す。其中に身の盛なる事は纔に

4 廿余年也。夢幻の世中に、醜物を片時もみ

5 て何かせむ。おもはしき物を見んとすれば、父の

6 命を背くに似たり。是善知識也。不_レ如、浮世

7 を厭、真の道に入なん」とて、十九の年髻剪て、

8 嵯峨の往生院に行澄してそゐたりける。

三十八オ 1 横笛此由を伝聞て、「我をこそ捨て、様をさへ

2 かへけん事のうらめしさよ。縦世をは背共、なとか

3 角としらせさるらん。人こそ心勁共、尋て恨」と

4 思つゝ、或くれかたに都を出て、嵯峨の方へそあ

5 くかれける。比は二月十日余の事なれば、梅津の

6 里の春風に、余所の匂ひもなつかしく、大井川の

7 月影も霞に籠て朧也。一方ならぬ憐さも

8 誰ゆへとこそ思けめ。往生院とは聞たれとも、

三十八ウ 1 さたかに何の坊とも不_レ知は、此にやすらひ、彼に

2 たゞすみ、尋かぬるそむさんなる。柄荒したる僧

3 坊に、念誦の声しけり。滝口入道か声と聞

4 なして、「童こそ是訖尋参たれ。様の換て

5 おはすらんをもみ奉らん」と、具したる女に_テい
はせ

6 ければ、滝口入道胸打噪、浅猿さに障子の

7 隙よりのそいてみれば、誠に尋かねたる気色

8 痛_ク敷覚えて、いかなる道心者も心よはふ成

三十九オ 1 ぬへし。頓人を出て、「全_ク是にはさる事なし。

2 門たかへにてそ有らん」とて、終にあはてそ返し

3 ける。横笛無_ク情うらめしけれ共、不_レ及_レ力涙を

4 押て帰にけり。其後滝口入道、同宿の僧に申

5 けるは、「是も世に閑にて、念仏の障碍は候はね共、

6 あかて別し女に此栖居をみえて候へは、縦一度は

7 心勁とも、又も慕事あらは、心も動候ぬへし。

8 暇申て」とて、嵯峨をは出て高野へ上り、清浄

三十九ウ 1 心院にそゐたりける。横笛も様をかへたる由聞

2 えしかは、滝口入道一首の哥をそ送りける。

3 そるまてはうらみしかともあつさゆみ

4 まことのみに入そうれしき

5 横笛か返事に

6 そるとても何かうらみんあつさゆみ

7 ひきとゝむへきこゝろならねは

8 其後横笛は奈良の法花寺に有けるか、其

四十オ1 思の積にや、無幾程て、終にはかなくなり

2 けり。滝口入道か様の事共を伝聞て、弥深行

3 すましてゐたりければ、父も不孝○有しけり。親

者

4 共も皆もちひて、高野の聖とそ申ける。三位

5 中将、滝口入道に尋逢てみ給へは、都に候し

6 時は、布衣に立烏帽子、衣文を刷、鬢を撫、

7 はなやかなりし男也。出家の後は、今日初てみ給

8 に、未卅にもならぬか老僧姿に瘦衰て、濃墨

四十ウ1 染に同じ袈裟、香の煙にしみかへり、さかしけに、

2 思入たる道心者、浦山敷や被思けん。晋の七賢、

3 漢四皓か栖けん商山・竹林の有様も、是には

4 過しとそみえし。

高野之巻 九

6 ○滝口入道、三位中将をみ奉て、「こはうつゝとも

7 おほえ候はぬ物哉。八嶋よりは是まては何として遁

8 させ給て候やらん」と申ければ、三位中将、「されは

こそ。

四十一オ1 人なみくに都を出て、西国へ落下たりしか共、

2 故里に留置し恋しき者共か面影のみ、身に

3 ひしと立添て、無忘間ければ、其物思ふ心の不云

4 にしるくやみえけん、大臣殿も二位殿も、「此人は池

大

5 納言の様に二心あり」など、思ひ隔て給ひしかは、

6 最心もとゝまらて、これまてあくかれ出たるなれ。

7 是より山つたひに都へ上て、恋しき者共を今

8 一度みもしみえはやとは思へ共、本三位中将の事

四十一ウ1 心憂ければ、それも不叶。さては是にて出家して、

2 火の中、水の底へも入はやとは思へとも、但熊野へ

3 参らんと思ふ宿願有」と宣へは、滝口申けるは、

4 「夢幻の世中とはとてもかくても候なんす。たゝ

5 長夜の闇こそ心うかるへう候へ」とそ申ける。頓

6 此滝口入道先達にて、堂々巡礼して奥院

7 へそ被参ける。高野山は去帝城二百里、郷里

8 を離て無人声、晴嵐鳴梢、夕日影閑。八葉

四十二オ1 嶺、八谷、誠に心も可澄。花色は林霧底綻、

2 鈴音は尾上の雲にひゞけり。瓦に松生、垣に苔

3 茂して、星霜久覚たり。抑延喜の御門御時、

4 御夢想の御告あて、檜皮色御衣をまいらさ

5 せ給けるに、勅使中納言資澄卿、般若寺の
 6 僧正観賢を相具して、此御山に参、御廟の
 7 扉を啓、御衣きせ奉らんとし給ひけるに、霧
 8 厚隔て、大師おかまれさせ給はす。爰に観
 四十二ウ 1 賢深愁涙して、「我出悲母胎内、入師匠室
 2 以来、未犯禁戒。されはなとかおかみ奉らさるへ
 3 き」とて、五臓を投池て、発露啼泣し給へは、漸

4 霧晴て、如月出にて、大師おかまれさせ給けり。
 5 時に観賢流随喜涙、御衣をきせ奉り

6 給ふ。御髪の長生させ給ひたりしかは、奉剃

7 そ目出度。勅使と僧正は拝給へ共、僧正の弟

8 子石山の内供淳祐、其時は未童形にて供

四十三オ 1 奉せられたりしか、大師を不奉拝、深嘆

2 沈ておはしけるを、僧正把手大師の御膝に

3 押当られたりければ、其手一期か間香かりける

4 とかや。其移香は石山の聖教に残ていまにあり

5 とそ承る。大師、御門の御返事に申させ給ひ

6 けるは、「我昔値薩埵て、面悉伝印明。発

無比

7 誓願、陪辺地異域。昼夜哀万民住普賢
 8 悲願。肉身證三昧、待慈氏下生」とそ申させ
 四十三ウ 1 給ひける。彼摩訶迦葉籠鶏足洞、期氏頭
 2 春風給らんも、かくやとそおほえける。御入定は承
 3 和二年三月廿一日、寅一点の事なれば、過にし方は
 4 三百余歳、行末も猶五十六億七千万歳の後、慈
 5 尊出世三会の暁を待せ給らんこそ久けれ。

維盛出家 十

7 ○「維盛か身の無何雪山の鳥の啼らん様に

8 今日よ明日よと思物を」とて、涙くみ給ふそ

四十四オ 1 哀なる。塩風に黒、不尽情思に瘦衰て、其

2 人とはみえ給はね共、猶世人には勝給へり。其夜は

3 滝口入道か庵室に帰て、昔今の物語共し給

4 ひけり。聖か行儀をみ給へは、至極甚深床上には、

5 瑩真理玉らんとみえて、後夜晨朝鐘の声

6 には、覚生死眠らんとも覺えたり。可遁はかくて

7 もあらまほしくや思はれけむ。明ぬれば東禅院

8 智覚上人と申聖を請し奉て、出家せんとし

四十四ウ 1 給ひけるか、与三兵衛童景・石童丸を召て宣け

2 るは、「維盛こそ人しれぬ思を身にそへなから、路

3 狭難^{セハツキ}遁身なれば、いかにもなるとも、汝等は命
4 を捨てからず。此比は世にある人こそおほけれ、我い
かに

5 も成なん後、急都へ上て、各か身をも助、且は妻
6 子をもはくゝみ、且は又維盛か後生をも吊へかし」と
7 宣へは、二人の者共さめくと泣て、暫は御返事に
8 も不^レ及。良あて、与三兵衛押^レ涙^ナをて申けるは、

四十五才 1 「重景か父、与三左衛門景康は、平治の逆乱の時、

2 故殿の御供に候けるか、二条堀河の辺にて鎌

3 田兵衛に組て、悪源太に被^レ討候ぬ。重景もなし

4 かはおとり候へき。其時は二歳に成候ければ、少も

5 覚え候はず。母には七歳にてをくれ候ぬ。哀をかくへ

き

6 親^{シタシキ}者一人も候はさりしに、故大臣殿、『あれは我命

7 にかはたる者の子なれば』とて、朝夕御前にてそた

8 てられまいらせ、生年九と申せし時、君の御元服

四十五才 1 候し夜、忝も髪^{カシラ}をとりあけられまいらせ、『盛の

2 字は家の字なれば五代に付、重字をは松王に』と

3 仰候て、重景とは被^レ付まいらせて候也。其上童名^{ワラハ}

4 を松王と申ける事も、生れていみ五十日と申せし

5 時、父かいたるて参て候ければ、『此家を小松とい
6 へは、いはふてつくる也』と仰候て、松王とは被^レ付
まい

7 らせて候ける也。父のようて死にけるも、我身の
8 冥加と覚え候。同隸^{レイ}共にも随分芳心せられ
四十六才 1 てこそ罷過候しか。されは故大臣殿御臨終の

2 御時も、此世中の事をは思召捨て、一事も仰候

3 はさりしに、重景を御前近被^レ召て、『あな無慚や。

4 汝は重盛を父か形見と思、重盛は汝を景康か

5 形見と思てこそ過しつれ。今度の除目に鞆^ヲ

6 負尉^{キエウ}になして、汝か父景康を喚^{ヨビ}し様に召は

7 やと思召つるに、空なるこそ悲しけれ。相構て少

8 将殿の御心にはしたかふな』とこそ仰候しか。されは

四十六才 1 此日来自然の事も候は、見捨てまいらせて、可^キ落^ツ

2 物と思食候けるか。御心中こそ恥かしう候へ。『此

3 比は世にある人こそ多けれ』と蒙仰候は、如^ニ当時

4 は皆源氏の郎等共こそ候らめ。君の神にも仏

5 にもならせ給なん後、楽^ハ栄候共、千年の齡^ヨを

6 ふるへきか。縦保万年とも、終にはおはりのなかるへ

7 きかは。これに過たる善知識、何事か候へき』とて、

8 手つから髻きて、泣く滝口入道にそらせけり。
四十七才1 石童丸も是をみて、本結際より髪をきる。

2 是も八よりつき奉て、重景にもおとらす不便

3 にし給ひしかは、同滝口入道にそ剃ける。是等か

4 か様に先達て成を見給ふにつけても、最心細

5 そなられける。かはらぬ姿を今一度恋しき者共

6 に見もしみえて後、かくならは、思事あらし」と宣

7 けるこそ、せめての事なれ。さても可有事なら

8 ねは、「流転三界中、恩愛不能断、棄恩入無

四十七ウ1 為、真実報恩者」と、三反唱給ひて、終に剃落

2 給けり。三位中将と与三兵衛は同年にて、今年

3 は廿七歳也。石童丸は十八にそ成にける。舍人武里

4 を召て、「己は是より八嶋へまいれ。都へは不可上。

其故

5 は、終にはかくれあるましき事なれ共、まさしう此有

6 様を伝聞ては、頓様をもちへむすらんと覚ゆる

7 そ。八嶋に参て此人々に申さんする事はよな、「且

8 御覽候し様に、大方の世間も物憂あちきな

四十八才1 さも万数そひてみえ候し程に、人々にかくとも

2 しらせまいらせずして、か様に罷なり候事、西国

3 にて左中将失候ぬ、一谷にて備中守被討候

4 ぬ、維盛さへか様に罷成候へは、いかに各のたより

5 なふ思召され候はんすらむと、其のみこそ心くるし

6 う候へ。抑唐皮と云鎧、小鳥と云太刀は、平将

7 軍貞盛より当家に伝て、維盛までは嫡

8 く九代に相当。若運命ひらきて、世もたち

四十八ウ1 なをる事候は、六代にたふへし」と申へし」と

2 こそ宣けれ。舍人武里涙にむせひ、俯臥

3 て、菟角の御返事にも不及。良あて、おきあか

4 り、涙を押へて、「いつくまでも御供申て、最期

5 の御有様をみまいらせて後こそ、八嶋へもまいら

6 め」と申ければ、「さらは」とて被具けり。滝口入道

を

7 も為善知識」とて被相具、山伏修行者の様

8 に出立て、高野をは立て、同じき国の内、山東

四十九才1 へそ被出ける。千里浜の北岩代王子の御前

2 にて、狩装束したる者七八騎か程、奉行逢。失

3 はんするにこそ、腹をきらんと、各腰の刀に手を

4 かけ給ひけるか、近付奉たりけれ共、少も可誤

5 気色もなく、深畏てそ透ける。「誰なるらん。此

6 辺にも見知たる者の有にこそ」と、あやしめて、
7 最足早に差給ふ程に、「是は当国住人、湯浅
8 権守宗重か子に、湯浅七郎兵衛宗光といふ
四十九ウ 1 者也。郎等共、「あれはいかなる人にてましく候や

2 らん」と問ければ、七郎兵衛涙を押して、「あれこそ
3 小松大臣殿の御嫡子、三位中将殿よ。八嶋より
4 是までは、何として遁させ給て候けるやらん。は
5 や御様かへさせ給てけり。与三兵衛・石童丸も同し
6 う出家して御供申たり。近付参て、御見参
7 にも入たかりつれ共、憚もそ思召とて透ぬ。あ
8 な哀の御事かな」とて、袖を面に押当、さめく
五十オ 1 と泣ければ、郎等共も皆袖をそぬらしける。

熊野参詣 十一

3 ○漸差給ふ程に、岩田河にも付給ぬ。「此川の流
4 を一度も渡者は、悪業煩惱無始罪障も消
5 なる物を」と、頼しうそ思食。本宮に参付、證誠
6 殿の御前にて、静に法施まいらせて、御山の様
7 を拝給ふに、心も詞も及はれず。大悲擁護の霞
8 は熊野山にたなひき、靈験無双の神明は、無レ音
五十ウ 1 河に垂レ跡。一乗修行の岸には、感応月無レ限、

2 六根懺悔の庭には、妄想の露も不レ結。何もく
3 頼しからすと云事なし。夜深人しつまで後、啓白
4 し給ふに、父の大臣の此御前にて、「命をめして
5 後世を助給へ」と被レ申ける事なとまでも、思召出
6 て哀也。「本地阿弥陀如来にてまします。攝取
7 不捨の本願あやまたす、浄土へ導給へ」と被レ申
8 ける。中にも、「故郷に留置し妻子安穩に」と被

五十一オ 1 祈けるこそ悲しけれ。厭浮世、実の道に入給へ
2 共、妄執は猶不尽と覚えて哀なりし事共
3 なり。明ぬれば、本宮より舟にのり、新宮へそ被参
4 ける。神蔵をおかみ給ふに、巖松高聳、嵐破 妄
5 想夢、流水清流、浪濤塵埃垢らん共覚えたり。
6 明日社ふしおかみ、佐野松原差過て、那智御
7 山に参給ふ。三重に漲落滝水、数千丈まで
8 攀上、観音の霊像は岩の上にあらはれて、補陀
五十一ウ 1 落山とも可レ語。霞の底には法華読誦の声
2 聞、靈鷲山とも可レ申。抑権現当山に垂レ跡
3 させましくてより以来、我朝の貴賤上下運レ歩
4 傾首合掌、利生にあつからすといふ事なし。僧
5 侶されは双、道俗袖をつらねたり。寛和の

6 夏の比、花山法皇、十善の帝位をすへらせ給
 7 ひて、九品の淨利を行はせ給ひけん、御庵室の
 8 旧跡には、昔を忍ふとおほしくて、老木の桜そ
 五十二オ 1 開にける。いくらも列るたりける那智籠の僧共
 2 の中に、此三位中将を都にて能見しりたると覺
 3 しくて、同行に語けるは、「此なる修行者をいかなる
 4 人やらんと思ひ居たれば、小松大臣殿の御嫡子、三位
 5 中将殿にておはしけるそや。あの殿の末四位少将
 6 と聞え給ひし安元の春の比、法住寺殿にて
 7 五十御賀の有しに、父小松殿は内大臣左大將
 8 にてまします。伯父宗盛卿は大納言右大將にて、
 五十二ウ 1 階下に着座せられき。其外、三位中将知盛・頭
 2 中将重衡以下、一門公卿殿上人、今日を晴と時
 3 めき、垣代に立給ひし中より、此三位中将桜の
 4 花をかさゝて、青海破をまふて被出たりしかは、
 5 媚露花の御姿、翻風舞の袖、地を照し、天
 6 も耀計也。女院より関白殿を御使にて御衣を
 7 懸られしかは、父の大臣起座、是を給て右の肩
 8 につかけ、院を拝し奉り給ふ。面目無比少そみえ
 五十三オ 1 し。かたへの殿上人もいか計うら山しくや思はれけん。

2 内裏の女房達の中には、『深山木の中の楊梅
 3 とこそ覺』など、いはれ給ひし人そかし。只今大臣
 4 大將待かけ給へる人とこそみ奉りしに、今日は
 5 かくやつれはて給へる御有様、かねては思よらさり
 6 しをや。移はかはる世の習といひながら、哀なる御
 7 事哉」とて、袖を顔に押当て、さめくと泣け
 8 れは、いくらも列るたりける那智籠の僧共
 五十三ウ 1 も、皆うち衣の袖をそしほりける。
 2 維盛入水 十二
 3 三御山の参詣ことゆへなうけ遂ければ、浜宮と申
 4 王子の御前より、一葉の舟に棹さして、万里の
 5 蒼海に浮給ふ。遥沖に山なりの嶋と云所あり。
 6 其に舟を漕寄させ、岸にあかり、大なる松の木
 7 を削て、中将名跡を被書付。「祖父太政大臣
 8 平朝臣清盛公、法名淨海、親父小松内大臣左
 五十四オ 1 大將重盛公、法名淨蓮、三位中将維盛、法名淨
 2 円、年廿七歳、寿永三年三月廿八日、那智奥に
 3 て入水す」と書付て、又奥へそ漕出給ひける。思き
 4 りたる道なれ共、今はの時にも成ぬれば、さすか心
 5 細悲しからすと云事なし。比は三月廿八日の事

6 なれば、海路遙に霞渡、哀を催たくひ也。大方の
7 春たにも、暮行空は物憂に、況是は只今限

8 の事なれば、さこそは心細かりけめ。奥の釣舟の波

五十四ウ 1 に消入様に覚ゆるか、さすか沈もはてぬをみ給

2 ふに付ても、我身の上とやおもはれけん。各か一行

3 ひきつれて、今はと帰雁金の越路をさして啼

4 行も、故郷へことつてせまほしく、蘇武か胡国の

5 恨まで、思残せる無_レ限。「こはされは何事そや。

6 猶妄執の尽ぬにこそ」と思返して、西に向ひ

7 手を合、念仏し給ふ心中にも、「さても只今を限

8 とは都にはいかてか可_レ知なれば、風のたよりのこと

五十五オ 1 つても今や_レとこそ待んすらめ」と思つ、

2 けられ、合掌をみたり、聖に向て宣ひけるは、「あは

3 れ人の身に妻子と云ものをはもつましかり

4 ける物かな。此世にて物を思はするのみならず、後世

5 菩提の妨と成ける事の口惜さよ。か様の事を心

6 中に残せは、罪ふかかなる間、懺悔するなりとそ

7 宣ひける。聖も哀に思けれ共、我さへ心弱ては不

8 叶_レや思けん、涙押拭、さらぬ軀にもてなるて、「誠

五十五ウ 1 にさこそは思召され候らめ。高も賤も、恩愛の道

2 は思きられぬ事にて候也。中にも夫妻は一夜の

3 枕を双ふるも、五百生の宿縁と申せは、先世の契

4 不_レ浅。生者必滅、会者定離は、浮世の習にて候也。

5 末の露、本のしつくのためしあれば、縦君遅速

6 の不同有と云とも、後先_ヲ御別、終になくてもや

7 候へき。彼驪山宮の秋の夕、契も終には心摧端と

8 なり、甘泉殿の生前の恩も、無_レ終にしもあらず。

五十六オ 1 松子・梅生、_ハ涯の恨あり。等覚・十地、猶生死のを

2 きてにしたかふ。縦君長生の樂に誇給ふ共、此御

3 恨は終になくてもや候へき。縦又百年の齡を保

4 たせ給ふ共、此御別は唯同事と可_レ被_レ思召。第六天

5 魔王と云外道は、欲界の六天を我物と領して、

6 中にも此界の衆生の生死に離_ハ事を惜、或は妻

7 となり、或は夫となて、是を妨とするに、三世諸仏

8 は一切衆生如一子_ノ思食て、極樂浄土不退土にす、

五十六ウ 1 めいれむとし給ふ。妻子と云ものは、無始曠劫以来、

2 生死に輪廻するきつなゝるか故に、仏は重戒給ふ

3 也。されはとて、御心よはふ思召へからず。源氏先祖

伊与

4 入道頼義は勅命によて、奥州の夷貞任・宗任

5 をせめ給しに、十二年か間に人の頸をきる事、一万六
6 千人、其外山野の獸、江河の鱗、其命を断事

7 幾千万と云数をしらす。され共終焉の時、一念の

8 菩提心をおこししによて、往生の素懷を遂たり

五十七オ 1 とこそ承はれ。就中、出家の功德莫太なれば、先世

2 の罪障は皆ほろひ給ぬらん。縦人あて、七宝の塔を

3 起事、高卅三天にいたると云共、一日の出家の功德に

4 は不可及。縦又百千歳か間、百羅漢を供養した

5 らむする功德も、一日の出家の功德には不及と

6 被説たり。罪ふかゝりし頼義、心の猛か故に、往生

7 を遂。させる御罪業ましまさゝらむに、なとか浄土

8 へまいり給はて候へき。其上、当山権現は本地阿

五十七ウ 1 弥陀如来にてまします。始無三惡趣の願より、

2 終 ○ 三宝忍願に至訖、一々の誓願、衆生化度の

願な

3 らすと云事なし。中にも第十八の願には、『設我得

4 仏、十方衆生、至心信樂、欲生我國、乃至十念、若

5 不生者、不取正覺』と被説たれば、一念十念のたの

6 みあり。只此教を深信して、努々疑をなすへからず。

7 無二の懇念を致して、若は十反、若は一反も唱給ふ

8 物ならは、弥陀如来、六十万億那由多恒河沙の御

五十八オ 1 身を縮、丈六八尺の御形にて、觀音勢至無數の

2 聖衆、化仏菩薩、百重千重に囲遶、妓樂哥詠

3 して、只今極樂の東門を出て、来迎し給はむすれば、

4 御身こそ滄海の底に沈むと思召さるとも、紫

5 雲の上にのほり給ふへし。成仏得脱して、悟を開

6 給ひなは、娑婆の故郷に立歸て、妻子を導給はん

7 事、還来穢國度人天、少もあやまるへからず」とて、

かね

8 打鳴、念仏奉進。中将、可然善知識と思食、忽に

五十八ウ 1 妄念を翻し、西に向ひ、手を合、高声に念仏百

2 返計唱給て、南無と唱る声共に、海へそ飛入給

3 ける。与三兵衛・石童丸も同御名を唱つゝ、つゝゐて

4 海にそ沈ける。

5 三日平氏 十三

6 ○舍人武里もつゝゐて入らんとしけるを、聖泣くく

7 教訓しけるは、「下臈こそ猶もうたてけれ。争か御遺

8 言をは違奉らんとはするぞ。今はいかにもしてなか

らへ

五十九オ 1 て、御菩提を吊まいらせよ」と、泣く教訓しければ、

2 「をくれ奉る事の悲に、後の御孝養の事も不覺」と
て、

3 舟底に倒臥、おめき叫ける有様は、昔悉達太子

4 の檀特山に入せ給ける時、車匿舎人か健陟駒

5 を給て、王宮に還し悲も、是には過しとそみえし。

6 浮もやあかり給と、しはしは舟を推まはしけれ共、三

7 人共に深沈てみえ給はす。去程に、夕陽西に傾き、

8 海上も闇成ければ、名残は不尽思とも、さてしも

五十九ウ 有へき事ならねは、むなしき舟を漕かへる。と渡る舟

2 のかいのしつく、聖か袖よりつたふ涙、わきて何もみ

え

3 さりけり。聖は高野へ帰上。武里は泣く八嶋へまいり

4 けり。御弟新三位中将殿に、御文取出て奉る。是を

5 あけて見給て、「あな心憂や。我頼み奉るほと、人は

思

6 給はさりける事の悲さよ。さらは引具して、一所てい

7 かにもなり給はて、所てふさん事こそ忍けれ。大臣

8 殿も二位殿も頼朝に心をかよはして、都へこそおはし

六十オ 1 たるらめとて、我等にも心をき給しに、さては那智

の

2 沖にて御身を投てましますらん事よ。御詞て被

3 仰し事はなかりしか」と宣へは、「御詞て申せと仰

4 つるは、『西国にて左中将殿うせさせおはしまし候ぬ。

5 一谷にて備中守殿うたれさせましく候ぬ。御身

6 さへか様にならせましく候へは、いかに各のたより

なふ。

7 思召され候はんすらむと、そのみこそ心くるしう候

へ』。

8 唐皮・小鳥の事なとまでも、こまくと語申

六十ウ 1 たりければ、三位中将、「今は我身とてもなからふ

2 へしとも不覺」とて、袖を顔に押当てさめく

3 とそなかれける。故三位殿にいたく似まいらせ給

4 たりしかは、侍共もさしつとひて、皆袖をそぬらし

5 ける。大臣殿も二位殿も、「池大納言の様に頼朝に

6 心をかよはして、都へこそおはしたるらめと思たれば、

7 さてはさはおはせさりけり」とて、今更又なけき悲し

み

8 給けり。四月一日、鎌倉前兵衛佐頼朝、正下四位し

六十一オ 1 給ふ。元は従下五位にておはせしか、忽に五階をこえ

2 給ふこそ目出けれ。同三日、崇徳院を神とあかめ奉

3 るへしとて、昔御合戦ありし大炊御門か末に、社
4 をたて、宮うつしあり。これは院の御沙汰にて、内
5 裏にはしろしめされすとぞ聞えし。五月四日、池大
6 納言頼盛卿、関東へ下向。兵衛佐殿使者を奉て、
7 「とくして下給へ。故尼御前を見奉ると存て見参
8 に入へき」由、被申たりければ、大納言頓立給ぬ。爰
に

六十一ウ1 弥平兵衛宗清と云侍あり。相伝專一の者なりしか、
2 相具しても不下。「いかにや」と宣へは、「君こそ角て
ま

3 し／＼候へ共、御一家の君達の西海の波の上に漾せ
4 給ふ御事の心くるしくて、未安堵しても覚候はす。心
5 少おとしすへて、おさまに参候はん」とぞ申ける。大
納言はつ

6 かしう、かたはらいたくおほして、「此上はくたさ
るへきにも

7 あらず。遥の旅におもむけは、なとか見をくらさる

8 へき。うけす思は、落留し時なとさはいはさりし

六十二オ1 そ。大小事、一向汝にいひあはせしか」と宣へは、宗
清の

2 なをり畏て、「御とまりを悪るとには候はす。高も賤
3 も、人の身に命程惜物やは候。縦世をは捨共、身
4 をは不捨とこそ申伝て候めれ。兵衛佐もかひなき
5 命を被助まいらせて候へはこそ、今日はかゝる幸にも
逢

6 候へ。流罪せられ候し時も、故尼御前の仰にて、篠原
7 の宿まで打送候き。『其事なと今に不忘』と申
8 候へは、御供に罷下て候は、定て引出物、饗応
六十二ウ1 なども候はんすらむ。それにつけても、西海の波の上
に

2 漾はせ給ふ御一家の君達、又は同隸共の返きかんす
る

3 所、返く無云甲斐候へし。遥の旅に趣かせ給ふ

4 御事はさる御事にて候へ共、敵をも攻に御下候は、

5 先一陣にこそ候へけれ共、是はまいらす共、更に御

6 事闕候まし。兵衛佐殿尋被申候は、『折節あひ

7 いたはる事あて』と仰候へし」とて、涙を押して留ぬ。

8 是を聞侍共も、皆袖をそぬらしける。大納言に

六十三オ1 か／＼しうかたはらいたく思はれけれ共、此上は下ら
2 さるへきにもあらずとて、頓立給ぬ。同廿三日、池大

- 3 納言頼盛卿、関東へ下着。兵衛佐急対面して、
- 4 先、「宗清は御供に罷下て候やらん」と尋被申ければ、
- 5 「折節相労はる事あて」と宣へは、「いかに何をいた

はり

- 6 候けるやらん。先年あの宗清か許に候し時、事に
- 7 触て情ふかふ候しかは、哀罷下候へかし。とくして見
- 8 参に入らんと存て候へは、猶意趣を存して候ける
- 六十三ウ 1 にこそ。うらめしうも下候はぬ物哉」とて、下文共余

- 2 多なしまふけ、様々の引出物をたはんとて、用意せら
- 3 れたりけるに、くたさりければ、上下無本意事に
- 4 てそ有ける。六月九日、頼盛卿都へ帰上給ふ。兵衛佐
- 5 殿、「今暫角てもおはしませかし」と宣へ共、大納言、
- 「都

- 6 に無覚束思ふらんにとて、頓立給ぬ。「知行し給
- ふへき

- 7 庄園私領一所も相違あるへからず、并に大納言に
- 8 なし可被返」よし、法皇へ被申けり。鞍置馬三十
- 疋、

- 六十四オ 1 はたか馬卅疋、長持卅枝に、羽・金・巻絹・染物風
- 2 清物を入て被奉。荷懸駄も三百疋まで有けり。

- 3 兵衛佐か様にもてなされければ、大名小名我もく
- 4 と引出物を奉る。池大納言頼盛卿、命生給ふ
- 5 のみならず、旁徳つゐてそ帰被上げる。六月十八日、
- 肥

- 6 後守定能か伯父、平太入道定次を先として、伊
- 7 賀・伊勢の官兵、近江国へ打出たり。源氏の末葉
- 8 等発向して、致合戦。伊賀・伊勢の官兵等し
- 六十四ウ 1 はしもたまらず、頓被攻落。平家相伝の家人にて

- 2 昔の好忘ぬ事は哀なれ共、おもひ立こそおほけ
- 3 なけれ。三日平氏とはこれなり。

北方出家 十四

- 5 ○去程に、小松三位中将維盛卿の北方は、風の便の
- 6 事伝も絶。○久なりければ、月に一度なとは音信物
- を

- 7 と思ひて待れけれ共、春過夏にも成ぬ。「今は三
- 8 位中将八嶋にはおはせぬ物を」と、申人有と聞給
- 六十五オ 1 て、北方余のおほつかなさに、とかくして使者を一人
- 2 八嶋へ被奉たりけるか、頓不立還。夏蘭秋にも成
- 3 ぬ。七月の末に、彼使還来れり。北方、「さていかに
- や」と

4 問給へは、『過し三月十五日の暁、与三兵衛重景・石童

5 丸を御供にて、讃岐八嶋を御出あて、高野へま
6 いらせ給ひ、高野にて御出家せさせおはしまし、熊
7 野へまいらせ給ひ、那智の沖にて御身を投てま
8 します』とこそ、御供申候し舍人武里は申て候
六十五ウ 1 つれ』と、細くと語申たりければ、北方、「されはこ
そ、恠

2 と思たれは』とて、引かつめてそ臥給ふ。若君姫君
3 も声くにおめき叫給けり。若君の乳人の女房な
4 みたをおさへて申けるは、『是は今更敷かせ不可給。
5 本三位中将殿の様に、生ながら被_レ因てのほらせ給
6 てさふらは、いかに心憂侍ふへきに、これは高野へ
7 まいらせ給ひて、高野にて御出家せさせおはしまし、
8 後世の事能く申させ給て、熊野へまいらせ給ひ、
六十六オ 1 那智の沖にて御身を投てましますらむこそ、歎
2 の中の御悦にて侍へ。今は御様をかへ、仏の御名を
3 も唱給て、なき人の御菩提をも吊まいらせ給
4 へ』と申ければ、北方やかてさまをかへ、かたの如く
仏事

5 をいとなみ給ふそあはれなる。

藤戸 十五

7 ○鎌倉殿此由を聞給て、『あはれ無_レ隔_レ打向ひて
8 おはしたらは、さり共命計をは助奉てまし。其故は、
六十六ウ 1 池禅尼の使として、頼朝を流罪に宥_レられける
2 事は、偏に彼内府の芳恩也。其恩争_カ可_レ忘なれば、
3 子息達をもおろかに不_レ奉_レ思。ましてさ様に出家
4 なとせられなむ上は、子細にや及へき』とそ宣ひける。
5 去程に、平家讃岐八嶋へ渡給て後は、東国より
6 荒_ヲ手の軍兵数万騎都に付て、攻下共聞ゆ。
7 又、鎮西より臼杵・戸次・松浦党、同心して押渡
8 共聞えけり。聞_キ彼、聞_ク此にも、唯耳を驚し、
六十七オ 1 肝魂を消_スより外のことそなき。女房達には、
2 女院・北政所・二位殿以下、女房達よりあひ給て、
3 「我方様にいかなる憂事をか聞かんすらむ、いか
4 なるうきめをかみむすらん』と、歎あひ悲しみあ
5 はれけり。今度一谷にて一門の人々大略被討、宗
6 との侍共数を尽_シて亡にしかは、今は力尽はて
7 て、阿波民部大夫重能か兄弟、四国の者共
8 かたうて、さりとと申けるをそ、高山₊深海₊とも

六十七ウ 1 頼給ける。去程に七月廿五日にもなりぬ。女房達

2 は指つとひて、「去年の今日は、都を出し物を。無程

3 廻来にけり」とて、あはたしく浅ましかりし

4 事共宣出して、泣ぬ笑ぬそし給ひける。同廿

5 八日、都には新帝御即位あり。内侍所・神璽・

6 宝劔もなくして御即位の例、人皇八十二代、是

7 初と承る。同八月六日、除日被行て、蒲冠者

8 範頼、参河守になる。九郎冠者義経、左衛門尉

六十八オ 1 になる。則使宣旨を蒙て、九郎判官とそ申

2 ける。去程に、萩の上風も様々身にしみ、萩の下

3 露も弥くしけく、うらむる虫の声く○、稲葉打そよ

4 き、木のはかつちるけしき、物思はさらんたにも、深

ゆ

5 く秋の旅の空は悲かるへし。まして平家の人々

6 の心中、被推量て哀也。昔は九重の雲の上に

7 て、春の花を翫ひ、今は八嶋浦にして、秋の月に

8 悲。凡さやけき月を詠しても、都の今夜いかなる

六十八ウ 1 らんとおもひ遣、涙を流し、心を澄してそ明し暮

2 し給ける。左馬頭行盛、

3 君すめはこれも雲井の月なれと

4 なを恋しきはみやかなりけり

5 去程に同九月十二日、大將軍三河守範頼、平家

6 追罰の爲にとて、西国へ発向す。相伴人々、足

7 利藏人義兼・北条小四郎義時・齋院次官親

8 義、侍大將には、土肥次郎実平・子息弥太郎遠

六十九オ 1 平・三浦介義澄・子息平六義村・畠山庄司次

2 郎重忠・同長野三郎重清・佐原十郎義連・

3 稲毛三郎重成・佐々木三郎守綱・土屋三郎宗

4 遠・天野藤内遠景・比氣藤内朝宗・同藤四

5 郎義員・八田四郎武者朝家・安西三郎秋

6 益・大胡三郎実秀・中条藤次家長・一品房

7 章玄・土佐房正俊、此等を先として都合其勢

8 三万余騎で、都を立て播磨の室にそ付にける。

六十九ウ 1 平家の方の大將軍には、小松新三位中将資盛・

2 同少将有盛・丹後侍従忠房、侍大將には、越中次郎

3 兵衛盛次・上総五郎兵衛忠光・悪七兵衛景清

4 を先として、五百余騎兵船に乗つてこき来たり、

5 備前の小嶋に付と聞えしかは、源氏室を立て、是

6 も備前国、西河尻・藤戸に陣をそ取たりける。去程

7 に、源平両方陣をあはす。陣のあはひ、海の面わつか

に

8 五町計をそ隔たる。源氏心は猛^{マツ}に思へ共、舟なかり

七十

オ1 ければ、不^レ及^レ力。向山^{ムカヤマ}に宿して、徒^イに日数をそ送

2 ける。同廿五日の辰^チ剋^キ計、平家の方よりはやりお

3 の兵共、小舟に乗^ツて漕出^{ソウシュツ}させ、扇をあけて、「此を渡

4 や」とそ招^イたる。源氏、「安からぬ事也。いか、せん」と云^イ処

5 に、近江国住人佐々木三郎守綱、浦の男を独^カかた

6 らひ、直垂・小袖・大口・白鞘巻^シなとをとらせ、すかし

7 おほせて、「此海に馬にて渡ぬへき所やある」と云^イけれ

8 は、男申けるは、「浦の者共いくらも候へ共、案内知^チ

七十

ウ1 たるは稀に候。不^レ知^シ者こそ多^カ候へ。此男こそ能^カ

2 存知仕^ツて候へ。縦は、河の瀬の様なる所の候か、月頭^{ツキガ}に

3 は東^{ヒシ}に候、月の末には西に候。件の瀬の間^{アツヒ}、十町計

4 は候らん。是はたやすふ御馬にて渡させ給へし」と云

5 ければ、佐々木、「いささらは、渡^ツてみん」とて、彼

男と二人

6 まきれ出て、裸^{ハダカ}になり、件の瀬の様なる所^{（を）}に渡^ツて

7 みるに、けにもいたふ深^{フカ}はなかりけり。膝・腰・肩にたつ

8 所も有、鬢^{ヒシ}のぬるゝ所もあり。深き所をは泳^{フヨイ}て、

七十一

オ1 浅所^{カサ}に泳付。男申けるは、「是より南は、北よりは遥

2 に浅^{カサ}候。敵矢さきをそろへて待所に、裸^{ハダカ}てはかなはせ

3 給候まし。とうゝ帰らせ給へ」と云ければ、佐々木け

4 にもとて帰^カけるか、「下藁^{トコトモ}は度事^{トコトモ}なき者にて、又人

5 にもかたらはれ、案内をも教^シすらむ。我計こそ知^チめ」と

6 思ひ、男を差^シ殺^{コロシ}、頸かききて捨^ツてけり。明廿六日の

7 辰^チ剋^キ計、又平家の方よりはやりおの兵共、小舟に

8 乗^ツて漕出^{ソウシュツ}させ、扇をあけて、「此を渡^イや」とそ招^イたる。

七十一

ウ1 爰に近江国住人、佐々木三郎守綱、案内は兼^カて

2 したり、滋目^{シメ}結直垂に緋威^{ヒイ}鎧きて、連錢^{レンセン}草毛

3 なる馬に金覆輪鞍を、ひて乗^ツたりけるか、家

4 子郎等七騎、打入て渡す。大將軍三河守範頼、是

5 をみ給ひて、「あれ制^イせよ。留^{トモ}よ」と宣へは、土肥^{ツヒ}次

郎実

6 平、鞭鐙を合て追付、「いかに佐々木殿は、物のつる
て

7 狂給ふか。大將軍のゆるされもなきに、狼籍也。留
給へ」と

8 云ければ、佐々木耳にも不聞入渡しければ、土肥次
郎

七十二オ 1 も制しかねて、頓つれてそ渡たる。馬のくさはき、

2 むなかひつくし、ふと腹に立（米）所も有。鞍壺越（コス）処も

3 あり。深き所を泳（ヨヨカセ）て、浅所に打上。大將軍是を

4 見給て、「佐々木にたはかられにけり。浅かりけるぞ。

5 渡や渡」と下知し給へは、三万余騎の大勢、皆打入

6 てそ渡ける。平家の方には是を見て、舟共押

7 浮く、矢さきをそろへてさしつめ引つめ散々に射

8 けれ共、源氏の兵共是をことゝもせず、甲のしこ

七十二ウ 1 ろをかたふけ、敵の舟に乘移く、おめき叫て

2 攻戦。一日鬪暮し、夜に入ければ、平家の舟は沖に

3 浮。源氏は小嶋の地に打上て、人馬の息をそ休

4 ける。明ければ、平家は讃岐八嶋へ漕しりそく。源

5 氏は猛思へ共、舟なかりければ、頓つゝゐても不

戦。

6 昔より馬にて川を渡す兵ありといへ共、馬にて海
7 を渡事、天竺・震旦は不知、我朝には希代のため

8 し也」とそ、備前の児嶋を佐々木に（米）給はりける。

七十三オ 1 鎌倉殿の御教書にものせられけり。

大嘗会之沙汰 十六

3 ○九月廿六日、九郎判官義経五位尉になされて、九郎

4 大夫判官とそ申ける。去程に十月にもなりぬ。八嶋

5 には浦吹風もはけしく、磯打浪も高かりければ、

6 兵も不攻来。商客の行かふも稀にて、都のつて

7 もきかまほしく、空かきくもり、霰打散、いと消入

8 心ちそせられける。都には大嘗会あるへしとて、十月

七十三ウ 1 三日、御禊の行幸有けり。内弁をは徳大寺殿、

2 其時は未内大臣にてましくけるか、勤（ツトメ）○せ給ふ。

3 去々年先帝の御禊の行幸には、平家の内大

4 臣宗盛公被勤。節下の幄屋に付、前に竜の

5 旗立てる給ひたりし景氣、冠際、袖のかゝり、表

6 袴のすそまでも、殊に勝てみえ給へり。近衛司

7 みつな候はれしには、又立（チ）双人もなかりしそかし。

8 今日九郎大夫判官義経先陣に供奉す。木

七十四オ1 曾などには似す、以外に京なれたりしか共、平家

2 中のえりくつよりも猶をとれり。同十一月十八

3 日、大嘗会如^ル形被^ル遂行^ス。去^{スル}治承・養和の比

4 より、諸国七道の人民百姓等、或は源氏の為に

5 なやまされ、或は平家の為に亡^ハさる。○竈^{カマド}を捨て

山

6 林にましはり、春は東作^{トウサク}の思を忘れ、秋は西収^{セイシュ}の

7 営^イにも不^レ及^ス。いかにしてかか様の大礼^{タイライ}なとも可^レ被^レ

8 行なれ共、さても可^レ有事ならねは、如^ル形被^ル遂

七十四ウ1 ける。大將軍參河守範頼頓つゝゐてもせめ給は、

2 平家はたやすふ可^ホ亡^{ロフ}かりしに、室・高砂にやす

3 らひ、遊君・遊女共めし集、遊、酒盛、戯^タてのみ、月

4 日を送給ひけり。東国の大名小名雖^ト多、大將軍

5 の下知に随^ツ事なれば、不^レ及^ス力。只国^{クニ}のついへ、民

6 の煩のみあて、今年も既暮にけり。

7 平家物語 卷第十

七十五オ1

喜福内匠助

2 慶長拾年八月吉日

補説

愛知県立大学付属図書館蔵の慶長書写『平家物語』は、『国書総目録』（岩波書店刊行、昭和四五年）に「愛知女大（一方系、卷三欠、慶長一〇写一一冊）」と記されている。また、本書の挟み込みのメモに「一方流に属する」とある。

従来、一方系の語り本の伝本は覚一本・葉子十行本・下村本・流布本の四系統に分類されてきた。本書はこの中の葉子十行本系と思われたが、異なる本文の巻も存する。天草版『平家物語』に見られるような室町時代末期特有の変化した語形も現れるなど、国語学研究の方面からも価値があると考え、翻刻して学界に紹介することにした。平成三年のことである。

その後、『平家物語』諸本の本文研究も更に進んだ。この翻刻が巻六に至った段階で佐伯真一氏の目に留り、京師本系の一本であるうという指摘を賜り、『文学・語学』第一五六号（全国大学国語国文学会編、平成九年）の研究展望で紹介された。

京師本は右の四分類から説明すれば、葉子十行本系と下村本系古本との混態ないし取り合わせによって成立した本文である。これを見分ける最大の特徴は、巻六の末尾に次のような割注を付けて、「国綱事」の本文を掲載していることである。

或本二国綱事あり。惣一検校語之。ト一検校不語。此本玉一二

伝。同月ニそうせられける。此間ニ有。同廿二日前右大。

このことは先に佐伯氏から私信を賜って知った。その後、氏は三弥井古典文庫『平家物語』を刊行し、下巻（平成一二年）の解説で詳細に述べている。

〔既刊〕 愛知県立大学付属図書館蔵

慶長書写『平家物語』 翻刻

巻第一 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編） 第41号、

平成五年二月刊行。

巻第二 愛知県立大学『説林』 第39号、平成三年二月刊行。

（巻第三は欠巻）

巻第四 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編） 第40号、

平成四年二月刊行。

巻第五 愛知県立大学『説林』 第41号、平成五年二月刊行。

巻第六 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編） 第44号、

平成八年二月刊行。

巻第七 愛知県立大学『説林』 第44号、平成八年三月刊行。

巻第八 『愛知県立大学文学部論集』（国文学科編） 第45号、

平成九年八月刊行。

巻第九 愛知県立大学『説林』 第46号、平成十年三月刊行。

なお右の翻刻は、『国文学年次別論文集』（学術文献刊行会編、朋文出版刊行）の各巻の刊行年度の版に再録されている。

付記

愛知県立大学付属図書館蔵の慶長書写『平家物語』の翻刻を始め、それから十年の歳月が経過しようとしています。当初私は愛知県立大学在任中に完成したいと考えていました。が、諸般の事情で計画どおり進まず、昨年三月に退職することになりました。そこで、四月から勤務している岐阜聖徳学園大学教育学部の国語国文学会の皆さんにお願いして、巻第十を本誌に掲載させていただくことにしました。また、この稿のファイルの作成と校正には伊藤由美子さん・菅野恵美さん・藤壇佳史君の協力を得ました。ここに記して御礼申し上げます。